

# サクラマス 日本系

Masu Salmon, *Onchorhynchus masou masou*



### 漁業の特徴

主に日本とロシアの沿岸で漁獲されている。ただし、ロシアでは、ハバロフスク地方や沿海地方でのサクラマスの商業漁獲は現在禁漁で、主たる漁獲はサハリン州でのカラフトマス漁業における混獲である。漁獲のほとんどは日本であり、沿岸域での定置網やます引き釣り、一本釣り、刺網、底びき網等の様々な漁法が用いられる。また、本州日本海側の河川では主に遊漁対象として漁業権魚種に指定されている河川も多い。

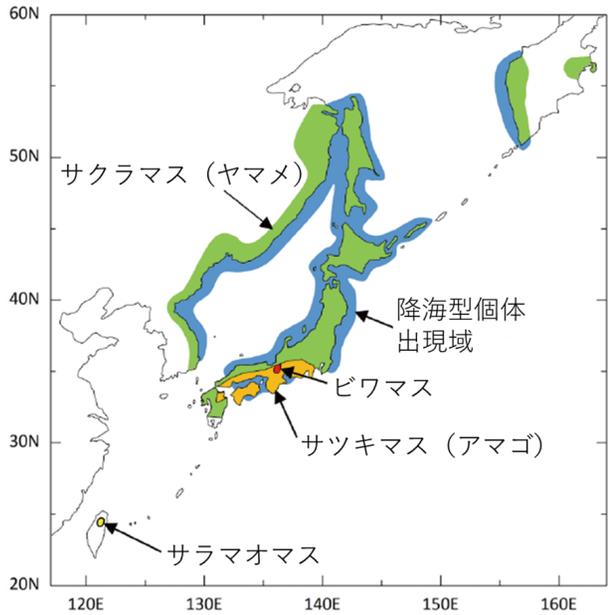
### 管理・関係機関

北太平洋溯河性魚類委員会 (NPAFC)  
日口漁業合同委員会

### 漁獲の動向

最も顕著な減少を示しているのは富山県で1980年代半ばは20トンを超える漁獲があったが、2006年以降の漁獲量は5トンに満たない。ついで、新潟県も、2011年を最後に20トンを超える漁獲量は記録されておらず、減少が著しい。また、青森県も富山県や新潟県ほど顕著ではないが減少傾向を示しており、1990年代前半まではほぼ毎年300トンを超える漁獲があったが、2000年以降は200トン程度あるいはそれを下回る年も目立つ。一方、北海道、秋田県、山形、岩手県の3道県では、直近の5年間で1990年代、2000年代と同程度の漁獲量を記録している年もあり、減少傾向とはいえない。ただし、北海道に関しては、1970年代以前は毎年のように1,500トン以上漁獲されていたため、長期的には減少したと考えられる。

- ### 生物学的特性
- 体長・体重：体サイズは個体群間変異が顕著。最大値の範囲は尾叉長40～80 cm、体重0.5～8 kg程度
  - 寿命・成熟年齢：降海型個体は3～4歳
  - 産卵期・産卵場：産卵は分布域北部から始まり、7月から11月の間に1か月弱、河川中～上流域
  - 索餌期・索餌場：河川・海洋とも周年であるが、季節変動は大きい(ただし、産卵遡上後は索餌しない)。
  - 食性：河川では、水生、陸生の無脊椎動物、稀に魚類。海洋では魚類や大型のプランクトン。
  - 捕食者：河川では魚類、鳥類、遡上親魚は中型哺乳類。海洋については詳細不明。



サクラマスとその近縁種の自然分布域

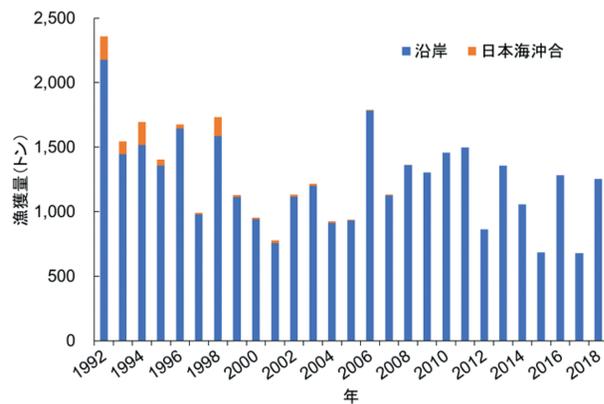
### 利用・用途

生鮮での流通が中心である。主に、ルイベや塩焼き、フライ、ムニエル等にして賞味される。魚卵の利用は、ほとんど見られない。富山県のます寿司の原料としても有名。

資源状態
<p>1970～1980年代と比べると漁獲量は全体的には減少しているが、年変動も大きい。ただし、2000年から2018年にかけての国内の沿岸漁獲量は極端に減少しているわけではない(平均1,140トン:678～1,788トン)。したがって、資源水準は中位、資源動向は横ばいと判断した。ふ化放流事業による資源増殖の効果は懐疑的であるが、近年、河川分断化解消等の影響もあって、新たな産卵河川、個体群定着河川が確認されている。自然再生産による資源増加が期待され、今後の資源動向を注視する必要がある。</p>

管理方策
<p>放流効果は十分に得られていないだけでなく、近年の研究から、放流魚は野生魚を駆逐すること、放流による密度増加はヤマメ幼魚の成長率低下を招き、結果として将来的な漁獲対象であるスモルトの出現率が低下することが分かってきた。一方、近年漁獲されるサクラマスのうち70～80%は野生魚であること、河川分断化解消等により産卵河川が増加していることが報告されている。これらを踏まえると、ふ化放流事業よりも自然再生産に重点を置いた資源管理を検討する必要がある。</p>

サクラマス(日本系)の資源の現況(要約表)	
資源水準	中位
資源動向	横ばい
世界の漁獲量(最近5年間)	681～1,290トン 最近(2018)年:1,273トン 平均:1,000トン(2014～2018年)
我が国の漁獲量(最近5年間)	678～1,254トン 最近(2018)年:1,254トン 平均:990トン(2014～2018年)
管理目標	現在の資源水準の維持 目標値:過去5年の平均沿岸漁獲量990トン
資源評価の方法	沿岸漁獲量による水準と動向の評価
資源の状態	2018年の沿岸漁獲量/目標値≒1.27
管理措置	0+春・秋、スモルト放流数計7,463千尾(2017年度) 道県の内水面漁業調整規則等による遊漁の制限(体長・持ち帰り数の制限、禁漁期の設定)
最新の資源評価年	なし
次回の資源評価年	未定



日本における沿岸漁業と日本海沖合におけるサクラマスの漁獲量の推移